

令和4年度 第2回八代市総合教育会議 会議録

(令和4年10月24日)

令和4年度 第2回八代市総合教育会議 会議録

【開催日】 令和4年10月24日（月）

【場所】 八代市役所 庁議室

【出席者】 中村博生 市長
北岡博 教育長
渡邊裕一 教育委員
奥村留美子 教育委員
早田 蛍 教育委員
澤村 互寛 教育委員

【出席職員】 福島誠治 副市長
村上理一 政策審議監
中 勇二 教育部長
橋口幸雄 教育部総括審議員兼次長
松川由美 教育部次長
田中智樹 教育部理事兼教育政策課長
田北佳一郎 学校教育課長
稲本健一 教育施設課長
高崎博文 生涯学習課長
櫻井幸枝 教育サポートセンター所長
松村哲治 教育部理事兼博物館未来の森ミュージアム副館長
佐藤圭太 市長公室長
浅川公利 秘書広報課長

【事務局】 萩本誠子 教育政策課教育政策係長
西村妙子 教育政策課参事

【協議事項】 <講演>
・テーマ 教育におけるDXについて
・講師 八代市ICT教育推進アドバイザー
小宮山 利恵子 氏

1 開会 (午前9時58分 開会)

2 市長あいさつ

3 協議事項

<講演> 教育におけるDXについて

<意見交換>

奥村教育委員

本日の開催通知をもらったところから何を聞いたらいいのかという状態だった。この会場で最高齢者の自分がわかればみんながわかるだろうというところから素朴な質問をしたい。その前に、講演の中で、想像力・共感力が不要な場合がAIで、それがあるのが先生たちであるという学校現場の先生たちにとっては勇気が出るようなところがあった。また、観察能力については、以前から子供を見る、授業を観る、と言われていたので、講演を聞いて自己有用感も養ってもらった。

市長のおかげで子供たちにはいち早くタブレットの配付があり、その後、指導の立場から先生たちにも配付があった。学校訪問の折に学校からは、もう少しこうしてほしいという声がないこともないが機器的には完備しているところである。子供たちが自主的に勉強するのにどんなソフトがいいか。当初は、使うことが目的ということで、これなら紙のドリルのほうがよほどいいという内容のものもあった。次にスタディサプリが入った。先生方からは使える内容だ、単にドリル的学習だけの内容ではないなどの反応を耳にした。耳に残ったのは、ある中学校でスタディサプリの活用が進まないで、校長がとにかく一斉に使おうと始めたころ、使っている状況が「どこか」に届いて、そこから使用開始のお知らせが来たので校長先生がほっとしたと言われていた。子供たちの活用状況、回答状況、いい意味で課題解決の傾向的なものまで把握できるのであれば、つまり、使った結果がどこかにデータとして集約され、子供たちの回答状況や理解状況の何らかの傾向をつかめるなら、その情報を学校に提供してもらえたらと思う。小学校算数では、掛け算の九九でのつまずきがよく取り上げられるが、実際は、1年生の2学期の繰り下がりの引き算からつまずきも多い。3年生の割り算の筆算になって、わからないのは、掛け算の九九よりそこということが私の経験では多々あった。子供の回答状況をつかめるのであれば、その学校や学級の子供の理解状況を把握できるのであれば、学校や担任に知らせてもらおうと、今までのつまずくところを経験的にだけでなく、研究的に系統的にデータとして把握できて、評価するとき、授業するとき、この点に注意しようという自信をもってできる。実態を知って適切な指導ができる。子供が使うだけでなく、教師にとっても効果的なもの

になる。大人の学びという点で、スタディサプリも子供用教材というだけでなく、教師にとってもそういうのに使えるのだろうか。そういうものがあると、スタディサプリもタブレットも敷居が高いと思っている先生たちにとっても有効なものになるのではないか。

小宮山アドバイザー データの回答状況の傾向については、日々どういう回答をしているか先生のダッシュボードに反映され、その場ですぐわかるようになっている。どこで子供たちがつまづくのか肌感覚では先生たちはご存じだが、データで分かればなおいいということだと思う。現在、スタディサプリを使う子のほうが自主性が伸びるなどのデータから分析できる研究結果は出しているが、学術機関との共同研究はまだ行っていない。インドネシアやフィリピンでは国が指定するアプリとなっていて、300万人ずつぐらい利用者がいる。多くの人に使ってもらってデータ量も豊富で、海外との比較や日本と共通の部分などの研究もしていきたいと思っているので、協力してもらって公開していきたい。

渡邊教育委員 学習支援センターに勤務している。4月当初からスタディサプリを中核に据えた学力補充に取り組んでいる。これまで自分で学習しようという意欲に消極的だった子供が、自分のわからないところがわかった。だから次はここを頑張ると意識が変わってきて、びっくりするぐらい集中して取り組んでいる。自分のつまづきを知って、中3の生徒が中1の問題をだれにも気兼ねせずできて、役立っている。全国的に見て不登校の子供たちとスタディサプリとの事例があれば教えてもらいたい。

小宮山アドバイザー ホームページにいくつか掲載しているが、九州でいうと、北九州の事例がある。不登校の支援が地域として割合的に多く、スタディサプリを使って適応指導教室で学習支援をしていた。また、名古屋市も政令自治体で人数が母数として多く、それに伴って不登校の子供たちが多い。教室でスタディサプリを使って、学校には行きたくないが、勉強はしたいという子がいる。その際、教育部署だけでなく、愛着障害がある子が多いので勉強だけでなくケアを担当する部署と、心理カウンセラーと一緒に取り組んでいくという事例があった。事例が参考になれば幸いだ。

早田教育委員 ICTと聞くと、家や建物の中で画面と向き合っという印象

だったが、話を聞いて、知の探索、現場に赴いて、生産者のリアルを感じて、疑問に思ったことをICTを使って調べる、など今までと違う使い方ができると感じた。自分の子供には学校ではできない体験をさせたいとっていて、干潟に連れて行ったりヨットに乗せてもらったりしている。ICTや小宮山さんがされている、教育として取り組めるICTを活用した市として教育として取り組まれている具体的な取組や事例があれば教えてほしい。また、家で保護者が教育をサポートしてできるものがあれば教えてほしい。

小宮山アドバイザー 事例は、基礎自治体ごとにだいぶ違う。首長の感度が低いと使い始めておらずICTの整備がやっと終わった、最近やっと使い始めたなどがある。感度が高い自治体は、いろんな使い方をしている。低学年だと、タブレットを持って外に出かけて昆虫や植物を写真に撮る。どういう生き物がいるか見に行き、帰ってアルバムを作って、発表会をする。発表会をすると、プレゼン力がつく。プレゼンは量をこなすほど質が高まってきて、人前で話すことが嫌だという子も慣れてくる。これからの時代プレゼン力がないと自分の信用が高まっても売っていきることができないので、これから非常に重要な力である。校種にもよるが、高学年になるほど、できることがたくさんある。プログラミングをやりたい子は、ずっとプログラミングをやる。失敗と改善を繰り返すものなので、紙ではできない。首長の意向と学校の先生がどこに関心があるか、アントレプレナーシップに関心があるところは、敷地内でジャムを作って、道の駅で売る。売るだけではなく、広告を使って、発信していく。地域の学校間でインスタのフォロワー数をどうやって増やすかなど無限にできることはある。年齢によって、校種によって、やりたい領域によってできることがたくさんある。特定の分野でやりたいというのがあれば改めて情報提供できる。

保護者のサポートについては、自分の子育てをよく質問される。スマホは中1から、タブレットは未就学児のときから渡していたが、何をやっているかわかるところで使用するようにしていた。五感を使うリアルな学びは子供の頭の中に疑問符がたくさん浮かぶ機会を作っている。海外にも連れていっているがルワンダ、ケニア、インド、ドバイなど子供に人気のないところに連れていく。そのほうが頭に疑問符が浮かぶ。日本との違いについて、疑問符が浮かび、疑問に思ったことについて会話もでき、検索して自分で調べることもできる。できるだけ頭の中に疑問符が浮かぶような機会を作っている。

早田教育委員 SNS を使ったフォロワー数を増やすという話があったが、高校でやっているのか。小中学校でもやっているのか。

小宮山アドバイザー 小中学校でやっているところもある。

奥村教育委員 アナログと ICT の活用バランスについて、野に出て昆虫の写真撮ってプレゼン用にする。プレゼンが目標ならそれもいいと思う。しかし、じっくり見るなら実際に書いてみることに勝るものはない。大人にとって重要なのは、選択バランスである。写真を撮ってそれが昔の朝顔の観察にとって替わるというのは、何か違うだろうと身をよじる思いがする。全体的に ICT の活用バランスをどうしたらいいかというのは過渡期だと思う。その過渡期の中で目指す方向性についてずっとアドバイスしてもらいたい。違う方向に行ってしまうと、写真は撮ったけど虫は触れない、たくさん写真を撮ったから昆虫学者になるのか、そうではない気がする。今後もアドバイスをお願いしたい。

小宮山アドバイザー 言われるとおりに思う。分けて考える。写真を撮って、アルバムを作って、プレゼンをするというのもあっていいし、スケッチをして細かいところまで見るということもいい。中学生の時に修学旅行のしおりの最初のページが白紙で、行きたいお寺の写真を見ながらスケッチをするようになっていた。とても記憶に残っていて、実際行ったときによく見る。ディテールを見るというのは非常に重要だと思っている。レオナルド・ダ・ビンチは細かいところまでスケッチをして、友達に見せて、自分の思っているものと合っているかを見せながら改善していった。そういうやり取りは非常に重要で、手を動かすということが重要だと思っている。コロナになってから海外に行けなくなって、地方にも行けなくなった。最近緩和され、毎週出かけるようになって、タブレットを触る時間が減り、考える時間、歩く時間が多くなった。使い分けが大事である。若い先生はテクノロジーに感度が高く、得意の意識を持っている。授業時間めいっぱいテクノロジーを使う若い先生がいるが保護者からクレームが来ている。使わなくていいところまで使うとそれはまた課題である。使い分けは過渡期で、試行錯誤している途中なので、だんだんわかってくるが、それは、使わないとわからない。テクノロジーを活用して、区別してあげたい。必要であれば、学校に赴いて話をすることができる。

澤村教育委員 刺激的な内容で大変勉強になった。教員をしていたので、知

の深化と知の探索の両利きの学び方に特に興味があった。知の深化、知識の詰め込み、間違えてはいけない、答えがあるからそれにたどり着くという、一生懸命に勉強してきた世代で、教員時代を振り返ってみると知の探究のほうもそれなりにやってきたつもりである。自分たちの子供時代は、学校教育では知の深化をして、普段の生活でアナログ体験をできていた世界だった。今の子供たちは、少子化などの社会の変化で兄弟や地域の子供とのふれあいなど体験するものが少なくなり、生きる力の衰えを感じた。教育におけるDXが進んでいくと授業の効率化、時間の短縮化ができ、五感を使った教育が余った時間でできるようになる。今の子供たちには、そういう教育が大事だと思った。授業の効率化、時間短縮化で今までの良かった事例があれば教えてもらいたい。

小宮山アドバイザー 事例として紹介したいのは、千代田区立麴町中学校である。GIGA スクール前から1人1台配付していて、数学の時間に習熟度別に使ってもらった。1対40の授業は、できる子とできない子が学級の中に混在していて、少し前までは学力の山ができる子とできない子が少数で、それ以外が大部分だったが、ここ5年は、学力が散在していて、先生がどこに向けて授業をしていいかわからなくなってきている。1人1台配って、アプリを使って進めていったところ、それぞれのわからないところから始めるので、効率よく学べた。1人1台だと、生徒がPCに向かって黙々とやるイメージかもしれないが、学びあいが発生した。いろんな授業で発生して、通常の授業時間数の半分で全員が数学を習得した。千代田区なので経済的に恵まれた子供たちが通っていて、親の学力水準が高いからだろうと言われることもあるが、公立でもあるので、一概にそうとも言えない。3、4年前の事例であるが、こういう事例は全国でも見え始めている。私立は特に活用が進んでいて、そこを圧縮できた分、違うところに回せる。ある私立では、午前中だけで授業を終わらせて、午後は探求学習、社会科見学を中心にしているところもある。学校も保護者もお金があるからできることではあるが、そういうところも出始めている。

福島副市長 ICT教育を進めることで効率性をもとに、余裕を持って知の探索、探求に時間を回せるというのはそのとおりだと思った。一方で、新採職員を見ると、公務員の場合、半年間は、条件付採用で、その後、正式採用を決めている。以前は6カ月見ると、仕事を覚えて、協調性もついて、すんなり正職員になるという

ことだったが、まだよく見ないとわからないという職員が増えている。そういうことからやや感としてあるのは、ICT教育が即メンタルの強さ、責任感、協調性、自己肯定感など非認知能力の向上に結びつくのか、結びつくのであれば、どんどん推し進められると思う。事例の紹介もいただいたが、そういうところの研究も今後進むと思うが、その辺の説明をいただけないかと思っている。

小宮山アドバイザー 今の時点で非認知能力を高めるために ICT ができることはすごく限られていると思う。1万人の高校生を対象に、スタディサプリを使って自主性が上がるか研究をした。例えば、メモを活用したなど何か自分で作業をしたという子供たちは自主性が上がっている場面が見えた。ただそれは、スタディサプリの中だけなので、非認知能力を上げるというと、アナログがまだ勝つのでは、活用が大きいのでは、と思っている。コミュニケーションをするにしてもラインなどよく問題になる。相手がどう思っているかわからないので、どうするか考えず送ってしまってトラブルになる。相手がどういう人かリテラシーがないので問題になる。ITで解決できる部分もあるかもしれないが、今は対面で実際に話をするとか、対面だと場の空気感を五感で感じられるが、オンラインだと2次元なのでわからない。アナログとICTの差はあると思う。VRで香りがわかるなどもあるが実用化に及ばず、実際体験することには到底及んでいない。非認知能力を上げるというのは、五感の学びがまだまだ勝っている。ICTが活用できるのは、紙のドリルをいかに効率的にするかや、学年をまたいだ学びができるというのが非常にいいと思う。

村上政策審議監 講演の中で、ICT教育の難しさが結構あるという中身だったと思う。市がスマートシティ・DXを進める中で教育の情報化と何が違うかと考えていた。市が進めるものは、市民、職員を対象に、ある社会課題、行政課題を解決するための手段の方策としてあくまでもICT使っていて、ICTを使うことを目的としていない。今回講演を聞いて、奥が深いと思ったのは、教育の場合は、使うこと自体が目的にもなっている。これが明らかに違っている。文科省の歴代の情報教育課長は、今総務省から行っている。学習指導要領の改訂に向けて作業をされていたとき何のために教育の情報化をするのかは、①情報教育 情報活用能力の育成、②教科指導におけるICTの活用 ICTを効果的に活用してわかりやすく深まる授業の実現、③校務の情報化 と

3つの側面があった。通常のDX、ICT活用はある課題を解決するための手段として使うが、学校現場では、児童生徒、教員も対象となって、通常は教育を向上させるための手段としてICT活用するということに尽きるが、教員、児童生徒が活用することそのものに慣れてもらって、育ってもらって社会に羽ばたいてもらうという活用することそのものが目的となっているものがあるので、市が進めている観点より少し側面が広いと思った。教育委員からスタディサプリでやるより紙でやったほうがいいという話があった。実際そのとおりだと思うが、今は活用して学んでもらうというそのものが目的となっている側面もあるので、そういう議論になってしまうのではと思う。資料の「本市の課題」にある「考えられる原因」の中の「ICT機器、ソフトの導入目的が共有されていない」とあるのは、まさにそこで、活用方法が何のためにやっているのか、児童生徒、教師、教育委員会周囲が明確にしておかないと何のためにやっているのかという議論になりかねないと思う。そのところが勉強させてもらったという所感である。

渡邊教育委員

ハードとソフトと人材については莫大な予算をかけてもらってありがたいが、学校の先生の意識を高める予算はかけづらいと思う。スキルのサポートはできていくと思うが、意識の差を縮めるサポートはどうしたらいいか。

小宮山アドバイザー

意識がすでに変わっている複数の先生を中心に勉強会、研修会をやっていただくのがいい。それに付随して、**Most Likely To Succeed** という映画の上映会を行い、未来の学校、教育現場がこういう方向に行くのではというコンセプトの共有があってもいい。映画とワークショップがセットで、映画を見た後に先生を対象にワークショップを行って、これからの教育がどうなっていくのか、各自で考えていく機会になる。需要があればそういう機会が提供できる。

4 その他

第3回総合教育会議は、来年2月か3月に開催予定

5 閉会

(午前11時46分 閉会)